

ちてうるはしきは櫻に及ものなし、よて後世にいたりては、花とのみいへば櫻の專稱ともなれるなり、貫之歌に、

櫻よりまさる花なき花なればあだし草木は物ならなく、清少納言も繪にかきておとる物といひ、宋景濂は、恐是趙昌所難畫と作れり、西土萬國にも此種絶てなしといへり、

〔古事記傳十六〕木花之佐久夜毘賣上に大山津見神之女、木花知流比賣と云もあり、名意木花は字の意の如し、佐久夜は、開光映の伎波を切めて加なるを通はして久と云なり、若子ワカを和久著サキさて光映を波夜と云は、上なる下照比賣の歌に阿那陀麻波夜とある波夜の如し。○註かくて萬の木花の中に、櫻ぞ勝れて美き故に、殊に開光映てふ名を負て、佐久良とは云り、夜と良とは横通音なり、小兒のいまだ舌のえよくも、めぐらぬほどの言には、眞理流禮呂も夜伊由イリされば此御名も、何の花とはなく、たゞ木花の咲光映ながら、即主と櫻花に因て然云なるべし、や、後には、木花と云て即櫻にせるもあり、古今集序の歌に、難波津に咲や木花とある是なり、これも何の花となく、た然にはあらず、又梅花とするは由なし、そは冬隱今は春べとイ云、又萬葉八丁に、藤原朝臣廣嗣、櫻花贈娘子歌に、此花乃云々、和歌にも此花乃云々とよめる是は贈る花を指て、字の此花と云る物ながら、櫻を木花と云から、其を兼たりげに聞ゆるなり、さていよ、後には、たゞ花といへば、もはら櫻のこと、なれり、それもおのづから

〔茅窓漫錄〕木花櫻

木花は古今集序細注よりして、千載以來梅花の名と成れり、されども其起りを考索するに、梅花にあらず、櫻花なり、木花開耶姫五字は、神代紀下一書第二に、妾是大山祇神之子、名神吾田鹿葦津姫、亦名木花開耶姫とあるを權輿とす、文木華アキラと木花は櫻樹にて、鎮座傳記に、伊勢朝熊神社以櫻樹爲木花開耶姫靈通サクラ、サクナ音す、見延經之注、此朝熊社、櫻宮ともいふ、西行の歌あり、○中略